

中国人作家による絵本「荷花鎮的早市」についての一考察

A Study of Picture book written by Chinese writer “Morning Market in Nika Town”

矢野 日出子

1 はじめに

上海市の繁華街を歩いていると1軒の絵本専門店を見つけた。それほど広くない店内には日本でも子どもたちに親しまれている海外の絵本が豊富に揃っている。ある絵本は中国語訳をされ、ある絵本は日本語訳あるいは英語訳でと国際色豊かな品揃えである。比較的高価であるにも関わらず何冊も購入している客もいる。さすが経済発展の著しい中国である。しかも子どもは一人っ子ときは教育にかける費用は惜しくないといった感である。子どもの早教育のためだろうか？文字を少しでも早く覚えさせる？外国語に幼い時から親しませる？日本でも本を読まない若者の活字離れが話題にされている。中国も然りである。活字を読むことも書くことも苦手な人が増えているそうで中国伝統の墨や筆も一部の愛好家のものになりつつあるとのことである。読書の習慣を付けることや活字に親しむことは幼児期からの生活の在り方にかかることは承知のことである。本の好きな子どもになってほしい、賢い子どもに育ててほしい。この絵本選びも子育てにける親達の意気込みを表わしているようである。

近いうちに14億人を数えるだろうと言われている中国の幼児教育はどのような方向へ進んでいくのだろうか？幼児教育の歴史も制度も全く異なる隣国の状況を絵本に視点を当てて考えてみたいと思う。

ここでは、「荷花鎮的早市」という上海の絵本専門店で見つけた1冊の絵本、帯には“中国・江南の美しい光の中に、ひとびとのくらしを生き生きと描く。中国の作家によるオリジナル絵本、はじめての日中同時刊行！”とあった。どのように日本語訳されているのかを探してみる。

2 幼児にとっての絵本の役割

今一度、幼児の成長・発達における絵本の役割を確認しておきたい。敢えて“幼児にとっ

で”と強調したい。現在、溢れるように絵本が出版され中には十分に大人の鑑賞に堪えられるものが数多くある。しかし優れた絵本は子ども達がどのように喜び楽しんでその絵本の世界を体験するかにかかっている。

また、子どもの反響をつかまなければ絵本の良し悪しも判断できない、と考えるからである。

(1) 体験を豊かにする機会を与えてくれる

人間は自分を豊かにさせるためには、いろいろな経験をすることが何より大切である。幼い子ども達にとってこの世の中は「知らないものだらけ」である。少し物心ついた頃「どうして?」「あれ何?」「これは?」等々、質問魔に変身する時期がある。この時期と前後して彼らは、自分以外の世界に気付く。この2歳前後から就学時ごろまでは子どもたちの感性の非常に瑞々しい時である。従ってこの時期を逃さずイマジネーションの世界を十分に味わわせることが大切である。

(2) 言葉の体験を促す

言葉は伝達的手段である。我々は日々、言葉に取り囲まれて過ごしている。言葉がなければ自分の気持ちを表現することも、相手の気持ちを理解することも出来ない。生まれたての赤ん坊は母親の守唄を聞いて大きくなる。言葉のもっている音や響きやリズムが赤ん坊の耳に入り定着し、そのうちその音が意味をもつようになってくる。音の美しさや楽しさなどを味わい、鋭い感性を育てることから言葉の体験は始まる。従って幼児には詩的な美しい言葉にふれさせることが何より大切なのである。

(3) 豊かな情操を育ててくれる

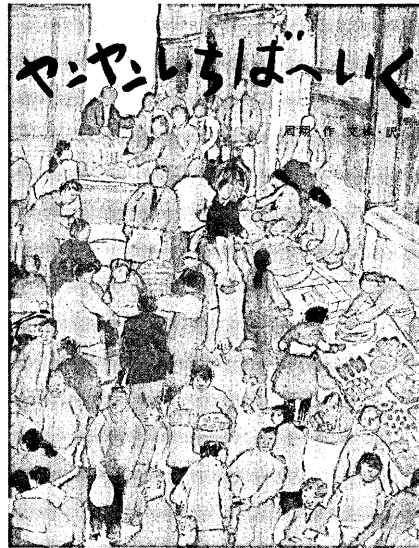
絵本を読んでもらう喜びの一つに仮想の体験をすることがある。ある時にはズンズン森の奥に入って行ったり、南の小島の砂浜に小鳥のさえずり聞きながら眠っていたり、継母にいじめられるお姫様になっていたりと等々、現実にはあり得ない空想の世界で遊ぶことができる。しかもハラハラドキドキしたり、主人公の気持ちに共感し涙したり、と人間としての情緒や情感などの感情を豊かにする。

(4) 人とのコミュニケーションを生む

絵本を子どもに読んでやる時間は子どもにとっても大人にとっても貴重なものである。親であったり教師であったり子どもにとっては一番自分を愛してくれる人が読んでくれることが最高の満足感を味わう体験となる。赤ん坊の時は主に母親や父親が、少し成長して先生や保育士が、そして絵本を読んでもらう空間は1対1から集団での体験となり楽しさを共有する仲間が

増えてくる。

上記のように幼児にとって絵本とは、私たち大人が優れた文学作品に出会って作者の思いに勇気付けられたり、共感したり豊かな幸福感に浸ることが出来たり等の同じ意味をもつ大切なものである、ということができる。そして幼児は厳しく反応する読者でもある。面白くなければそれなりの反応をし、楽しい気持ちになれるならば、1冊の絵本は大切な友だちになる。これらのことをいつも念頭におき大人は絵本を選択すべきである。



<周 翔・二十一世紀出版社・2006年6月第1版、2008年10月第3次印刷>

3 「荷花鎮的早市」についての日本語訳を考察する

次に「はじめての日中同時刊行」と謳われている「荷花鎮的早市」がどのように日本語訳されているかについて考えてみる。

(1) 作者「周 翔」について

1956年陝西省風翔県に生まれ、幼年期を江蘇省南通市で過ごす。

南京芸術学院美術科を卒業後、江蘇少年儿童出版社<<東方娃娃>>にて編集に携わる。1992年には、中国現代絵本原画展に出品、98年には江蘇省中日児童文学美術交流協会理事として日本との交流促進に尽力する。以後、絵本の理念を普及させたり新人を発掘・養成したりしながら児童書の挿絵や絵本創作にかかわる。

(2) 推測される背景となった町

この絵本は彼の幼年期の追憶をベースに描かれたものである、と述べられているのでこの地

のことにふれておきたい。

<中華人民共和国南通市>

江蘇省の南部に位置し、東に黄海、西に長江が流れ対岸には上海がある人口約770万の今、経済発展しつつある地方都市である。この南通市に実際に荷花町が存在するのかどうかは不明であるが、中国では、大多数の都市や鎮（町）では朝市がたつ。人々は買い物は朝に済ませてしまう。このことは日中の習慣の違いである。上海や北京など大都市においてはかつてのこれらの市は、近代化とともに今やコンビニに替わりつつある。作者である周は彼の幼年時の思い出として、この朝市を懐かしむ気持ちが強く、絵本に表現したのである。

筆者の経験では、荷花町が仮に存在するならば、今でも朝市はたっているだろう。それほど中国の人々にとって市場は生活と密着している。また、日本では夕食の食材等を買うのは夕刻であるが、中国では早朝、5時ころから市がたつ。買い物をしたり朝ごはんを食べたり市の果たす役割は大きい。また、朝市は10頃には終わってしまい、その場所には本来の商店が営業を始める。中国の伝統として、夜は早く眠り朝は大変な早起きである、とすることが出来る。

<上海近郊の町である「西塘」について>

「荷花鎮の早市」の周の描いている挿絵は美しい。淡いグリーンやブルーに主人公である「陽陽」<ヤンヤン、日本語では陽ちゃん>はどのページも帽子と上着は赤色で幼児が市場の雑踏の中でもヤンヤンの姿を見付けやすくしている。この描き方は、日本の子ども達に大変愛され続けている「とこちゃんはどこ」<加古里子 著・福音館書店 発行>を彷彿とさせるものがある。

周が「追憶を胸に、私は『ヤンヤンいちばへいく』を描きました。これは私の子ども時代の思い出の再現であり、愛する母にささげる特別な誕生日プレゼントなのです。」と語っているように彼の故郷の南通市に実在するかどうか不明であるが「荷花町」の市場を描いたものである。

ページをめくりながら一つのことを思い当たった。これはこのあたりに清や明の時代の建物が残っている「西塘」を描いているのではないか？あまりにも風景や家の建て方が酷似している。

西塘は江蘇省の南部に位置し、江省嘉善県の北部に位置する江南の観光地であり「六大古跡」のうちの一つの町である。この地は「生活着的千年古鎮」と言われるように、石畳（石皮）や1000Mもある「煙雨長廊」とい底のついた長い廊下などまるでタイムスリップしたような思いになる古い町である。作者は、この町を背景にイメージすることで失われつつある中国の伝統や文化を伝えようとしたのではないか。

4 「荷花鎮的早市」の日本語訳を考察する

同じ漢字を使用する両国は確かに文化面での共通点は多い。しかし中国語を見て単純に意味を推測することは危険である。全く異なった使い方をされている語句が非常に多いからである。ここでは原文の一字一字にこだわって読んでみたい。また、幼児が読むことを意識し、彼らにとって分かりやすく、興味を感じられるような日本語訳を試みる。

太字・・・矢野訳

明朝・・・文 妹訳

※・・・注 釈

荷 花 鎮 的 早 市

「にかまちのあさいち」「ヤンヤンいちばに行く」

※ 題名を「ヤンヤンいちばに行く」では、事実のみを語っている。この話の江南の雰囲気味わうには「にかまち<荷花町>」という地名を消してはいけない。主人公のヤンヤンを通して荷花町の朝市の雰囲気や人々の暮らしを描いているのだからこの地名が大きな意味をもつ。また日本の子どもは“いちば”とするとせいぜい商店街のような所しかイメージできない。

P 01

“阳阳来啦！”“阿姑好！”阳阳跟爸爸妈妈一起回到乡下、给奶奶过七十大寿。
明天他要早起、跟姑姑一起到集市上去买东西。

「ヤンヤン いらっしゃい」

「おばちゃん こんにちは！」

ヤンヤンはおとうさんやおかあさんと
いっしょにいなかにかえってきました。
おばあちゃんの70さいのおいわいをする
ためです。

「メイおばちゃん、こんにちは」

「ヤンヤン、よくきたね」

ヤンヤンは、おとうさんと おかあさんと
いっしょに、おばあちゃんの いる いなかに
やってきました。

あしたは おばあちゃんの 70さいのおたん
じょうびです。

ヤンヤンは はやおきして、メイおばちゃんと
いちばにかいものに行きます。

※ 原作にはおばちゃんの名前は書かれていない。しかしながら“メイおばちゃん”と日本語訳されているのは、

- ①「阿姑」とは、父方の妹を意味し年齢は当然のことながら本人の父親よりも若く主人公であるヤンヤンにとっては“お姉ちゃん”のような親しみやすい存在であると捉えられ“姉妹”の字をあててメイと名づけている。

- ②昔、大家族制度をとっていた中国では身内の呼称が大変に豊富である。日本語では単に叔父・伯父、叔母・伯母であるが大家族で暮らすことにより一人一人の厳密な呼称の区別が必要だったのであろう。このことは北京を中心とした北方地域に見られる「四合院」や福建省の永定県を中心とする「客家」はまさしく大家族主義の居住形態を物語っている。
- ③“70さいのおたんじょうび”と訳されているが、これは中国では60歳以上の区切りの歳には長寿を祝う習慣がある。日本の還暦、古希。米寿などと同様である。

P 02 ~ 03

“吱嘎——吱嘎——” 清早的薄雾里、响起了摇橹声。

ギーギー

あさもやのなかをろをこぐおとが
きこえます

つぎのひのあさはやく、ヤンヤンは おばちゃん
のこぐふねにのって、いちばへむかいました。
「ヤンヤン、もうすぐつくよ、おきなさい！」

※ 「ヤンヤン、もうすぐつくよ、おきなさい！」は原作にはない。このP 2～3は絵で語るべきである。幼児が絵をみて朝靄の静かさや櫓を漕ぐ音を想像する。従ってこの訳は現実的過ぎる。

P 04 ~ 05

小船拐了个弯、划进了一条水巷。

“夷、这里的房子怎么都盖在水里呀？他们怎么去买东西呢？”

“坐船去呀。在我们这儿、河就是路、船就是车。”

ふねはわんをまがって、まっすぐに
みちにはいってきました。
「ねえ どうしてここのおうちは
おみずのうえにたってるの？
あのひとたちはどうやっておかいものに
いくの？」
「おふねでよ。このまちではね、
かわがどうろで おふねがくるまなの
よ」

ふねは ほそいかわにはいりました。
りょうがわには、いえが ぎっしり
たちならんでいます。
「ここにも ふねが つないである」
「そうね。このまちでは、かわがみちのかわり
ふねが くるまのかわりなの」

※ この場合の“かわ（河）”とはクリークをさす。川べりの長い軒は前述の“煙雨長廊”といい上海市近郊の西塘の街をモデルとしていると思われる。ここには明代の建築物が現存している。「沉睡了千年的古鎮」と言われるこのあたりの家屋の特徴を消してしまっ

いるのは残念である。日本の幼児にも知らせるべきである。

P 06 ~ 07

“看、到那边我们就下船啦。” “他们都是来卖东西的吗？”

“是啊、这边是卖菜的、那边是卖酒的、那些坛子里装的都是自家酿的米酒呢。”

「ホラ あそこでおきましょうね。」
「あのひとたちもみんなものをうりに
きてるの？」
「そうよ、ヤンヤン。ここではやさい、
あそこではじぶんのうちでつくったお
さをうってるのよ」

「あの ふねのひとたち、いちばにみせをだす
の？」

「そうよ。みてごらん、こっちはやおやさん、あっ
ちは かめをつんでるからさかやさんだね。
とくさんのおさががはいってるのよ。あたした
ちも あそこにふねをつけるからね。」

※ この場面は町の人々があちらこちらから朝早くからやってきて店をひらく様子が描かれて
いる。ここでは商店の品物の種類よりも荷花町に暮らす人々の様子を伝えるべきであ
る。

P 08 ~ 09

阳阳和姑姑走进一条巷子。“啊—— 这么早就有人来卖东西啦！”

“嗯、有很多人都喜欢在早晨买菜。”

ヤンヤンとおばちゃんはおりに
はいっていきました。
「あっ、こんなにはやくおみせを
だしてる！」
「そうよ、にかまちのひとたちは、
あさはやくおかいものをするのがすきな
ひとたちがおおいのよ」

ふたりは いちばに つうじる ろじに
はいりました。
「うわぁ、こんなに はやくから おみせが
でているんだね！」
「ほんとだね。あんたみたいな ねぼすけには
つとまらんねえ」

※ 「ほんとだね。あんたみたいな ねぼすけには つとまらんねえ」この1行はあまりに
飛躍しすぎている。なぜならメイおばちゃんはこの地の人間である。日常的に朝市に買い
物に来ているのではないか？それなのにヤンヤンの驚きに“ほんとだね”と相槌を打つよ
りもこのまちの暮らしを伝えてやる言葉が必要ではないか？“あんたみたいな ねぼすけ
には つとまらんねえ”ここは訳者はユーモアと考えているかもしれないが、折角のヤン
ヤンのこれからの買い物をする期待感をつぶしてしまうのではないか。また、早朝の清清
しい雰囲気をこわしている。

P 10～11

“哎、李师傅、早！这是我哥的孩子阳阳、昨天回来的。”“爷爷好！”
“好、好！都长这么大了！跟他爸小时候一个样！是回来给奶奶过大寿的吧？”
“对呀、对呀。在你店里订的蛋糕、我回头来拿。”

「あら、リーさん。おはようございます。
ヤンヤンです。きのうかえってきたの。」
「おじちゃん、おはようございます。」
「おはよう！こんなにおおきくなって。
おとうさんのちいさいときにそっくりだ
なあー。おばあちゃんのおいおいにか
えってきたのかい？」
「そうなの。おじさん、かえりにもらい
にくるから、ケーキをおねがいます。」

「あら、リーおじいちゃん、おはようございます。
このこ、にいさんとこのヤンヤン。
ゆうべかえってきたの。」
「おじいちゃん、おはようございます。」
「おうおう、おおきくなったのう。
おとうちゃんのちいさいころにそっくりじゃ。
おばあちゃんのおいおいにかえってきたんだ
ね。」「そうなのよ。たのんでおいたケーキ、
おねがいね。あとでとりにくるわ」

※ ここではほぼ同じ訳であるが、おじちゃんとおじいちゃんの違いがある。「にいさんとこのヤンヤン」の“とこ”は簡略しすぎである。「にいさんのところの」か「にいさんちの」にすべきである。

P 12～13

“噉、噉、噉噉…” “哎呀、猪跑了！” “没关系、叔叔会把它们抓回来”
“阳阳、过来、过来、我们去买鞭炮。” “太好了”

「ブ、ブ、ブ……」 「あっ、ぶただ！」
「だいじょうぶよ、おじちゃんがすぐに
つかまえてもどってくるわ。」
「ヤンヤン、いらっしやい。ばくちくを
かいいいこう！」 「うん！」

「あっ、ぶただ！」
「ほらほら、ばくちくを かうわよ。
きょうは おいおいに
たくさん ならすからね。」
「ほんとっ？ やったー！」

※ 豚が逃げ出しているところは、都会育ちのヤンヤンにとって驚きであるので、省略しては意味がない。「きょうは おいおいに たくさん ならすからね。」と言ってしまうと爆竹に焦点が当たってしまい、ここの市場の雑踏や喧騒が消えてしまうと感じる。

P 14 ~ 15

穿过巷子就到了菜市场。“刚上市的非菜、掐掐看、很嫩的！”

“新鲜春笋、五块一斤！”“四块卖不买？”

“哎、新茶到了、回头过来喝啊！”“好啊、好啊。”

みちをわたるとやさいをうっているいちばにでました。

「つみたてのにらだよ。やわらかいよ。」

「しんせんなたけのこはどうだい？」

500グラム5げんだよ」

「4げんでかえる？」

「しんちゃだよ、かえりによって

のんでいきな」「ありがとう」

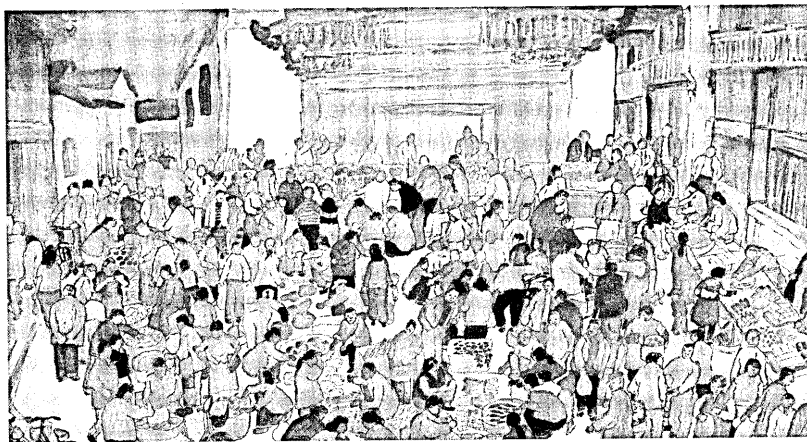
ろじをぬけると、おおきな ひろばに できました。
いろいろな たべものを うっています。

「うわぁ、すごいひとだねえ」

「そうですね。いちが たつ ひは こは
とっても にぎやかなのよ」

注…1元は約¥14

※ ヤンヤンは「うわぁ、すごいひとだねえ」とは原作では言っていない。朝市で売られている季節感あふれる新鮮な非や筍、茶葉などはすべて消えている。なぜだろう？ 幼児はそれらの野菜の名称を聞いては、絵をじっとみる。このことが彼等にとっては楽しいと感じるのだが。訳者には朝市での人々の売買の様子は幼児には理解できないと解釈して省略したのだろうか？ また、中国人である訳者は“集市”の集の意味を踏まえている。この集市は定期的なたつ市場のことである。



P 16 ~ 17

“老板、我们家老太太今天过大寿、给我挑两只肥一点的鸡。便宜点儿啊”

“好的、好的。”

“阿姑、那儿有小鸡在叽叽叫呢”“那你过去看看吧。不要乱跑啊！”

「おじさん、きょうね、わたしたちのおばあちゃんのおいわいのひなの。おいしそうなにわとりを2わくくださいな。やすくしてね。」「よしきた！」
「おばちゃん、あそこでひよこのなきごえがするよ。」
「じゃ、みておいで。まいごになったらだめよ。」

「とりやさん、きょうはうちの
おばあちゃんのおたんじょうびなの。
とびきり ふとったのを えらんでね。
おまけてよ」「よしきた！」
「ねえ、おばちゃん。あっちに ひよこがいる。
ピヨピヨ いったる！」
「じゃあ、みてらっしゃい。
そこからうごいちゃ だめよ」

※ 「そこからうごいちゃ だめよ」というメイおばちゃんの手紙は違ふ。訳者はおそらく、ヤンヤンがひよこを見に行つてそれから又、どこかへ行つてと、つまり彼が迷子になることを心配してこのように訳しているのだろう。しかし「そこからうごいちゃ だめよ」と迷子になることとは弱冠の違いがある。

P 18 ~ 19

“哇、小鸡毛茸茸的、好玩、好玩！” “小弟弟、要不买几只？”
“我家阳阳住在城里、没法养鸡啊。”

「わあー、かわいい！ふわふわ！」
「ぼく、どうだね？」
「ヤンヤンのうちはまちだからかえないよ」

「ふうわふわだぁ。よしよし……………」
あっ、にげるなよう」
「ぼうず、1わ どうだ？」
「このこ、まちに すんでるから かえないのよ」

※ 「あっ、にげるなよう」この部分は原作と異なる。ヤンヤンはひよこの可愛さに見入っている。また、絵から推測できるようにひよこも籠の中に入つていて逃げられない。幼児にもこのことは理解できる。「ぼうず」は「ぼく」程度にとどめておくべきである。

P 20 ~ 21

他们在河边碰见了姑姑的熟人。“张阿婆、待会儿你们早点来啊、老太太可想你们呢！”“好的、好的。我特地酿了老太太喜欢的米酒。”“喔唷、老太太更定很高兴！”
“阿姑、那边好热闹啊？”“噢、是用花轿去接新娘子呀！”

みちでメイおばちゃんのともだちに
ばったりあいました。
「ちょうさん、きょうははやく
きてくださいね。おばあちゃんがまっ
てるわ」
「わかったわ。おばあちゃんのすきな
おさけをつくってるのよ」
「おばあちゃんきつとよろこぶわ」
「おばちゃん、あそこはにぎやかだね」
「ほんとな、かごでおよめさんを
むかえにいくのよ」

かわぞいの みちで、メイおばちゃん
のしりあいにあいました。
「チャンさん。きょうは はやめに きてね。
おばあちゃん たのしみにしてるから」
「あいよ。おいわいの おさけも
つくってあるんだよ」
「あら、うれしい。おばあちゃん よろこぶわ」
「おばちゃん。あのぎょうれつ なあに？」
「ん？ああ、あれは かごで およめさんを
むかえにいく とこだよ」

※ ここはほぼ同じであるが、原作ではヤンヤンは“ぎょうれつ”とは言っていない。賑やかな雰囲気に興味を示している。訳者は<結婚式>すなわち<行列>というイメージがあったのかも知れない。

P 22 ~ 23

“阿姑、那边‘咚咚锵、咚咚锵’的、在干什么呢？”“在唱大戏呢”
“好象快开始了、我们过去看看吧”“好啊好啊、快点、快点！”

「おばちゃん、あそこでトントンチャン、
トントンチャンってなにしてるの？」
「げきのうたをうたってるのよ。もうす
ぐはじまるようよ。みにいきましょう！」
「いこう いこう、はやく はやく。」

「ねえ、ジャーン ジャーンって
あれ、なんの おと？」
「むこうで おしばいが あるの。そろそろ
はじまるみたいね。ちょっと いってみようか」
「うん いこう！ はやく、はやく！」

※ 「あれ、なんの おと？」これも原作では「なにをしているの？」である。

“江南地方に伝わる芝居”を連想させる。また、芝居に使う独特の楽器から醸し出される音色に対してヤンヤンが興味をもっている。ヤンヤンと一緒に読み手である幼児も興味を抱く。



“哇，这么多人在看戏呀！”
“这里一天要演好几场，大家都喜欢看。”

“你看，那边有个老婆婆还带着饭！”
“经常有人过来一看就是一天呢。”
“啊……看一天？那我们也能看一天吗？”

P 24 ~ 25

“哇、这么多人在看戏呀！” “这里一天要演好几场、大家都喜欢看。”
“你看、那边有个老婆婆还带着饭！” “经常有人过来一看就是一天呢。”
“啊……………看一天？那我们也看一天吗？”

「わあー すごいひと！」

「いちにちになんともいいおしばいをするから、みんながよろこんでるの。」

「ほら、あのおばあちゃんおべんとうもってきてる。いちにちじゅうおしばいみているひともおおいのよ。」 「うーん、いちにちじゅう？ じゃ、ぼくたちもいちにちじゅうみるの？」

「わあ！ きれいだねえ」

「この おしばいはね、この いちばの めいぶつなの」

「あ、あのおばあちゃん、おべんとうもってるよ？」

「そうなのよ。たのしみにしてて、いちにちじゅう みてく ひとも いるの」

「へえ、いいなあ。ぼくたちもいちにちじゅう みてこうよ」

※ この市場での芝居が名物だとも何も書いていないが、意味としては正しい。一日に何度も人気のある演目を上演すると言う意味である。この楽しい雰囲気に対してヤンヤンは自分達も「観ていくの？」とメイおばちゃんに尋ねている。また、「みてく」「みてこうよ」は「みていく」「みていこうよ」とすべきである。

P 26 ~ 27

“不行啊、还有好多事要做呢—— 哎哟、蛋糕可能做好了、我们过去拿把。”
“太好了、太好了、我最喜欢吃蛋糕啦！”

「ちがうちがう、おうちへかえって
やらなきゃならないことがいっぱいあるわ。
そうだ、ケーキがきつとできてるわ。と
りにいきましょう。」

「いこういこう、ぼく、けーきがだいす
きなんだ」

「だめだめ。これから かえって やることが
いろいろ あるからね。ほら、ケーキもそろ
そろ できてるよ。とりにいこう。」

「そうだ、ケーキ！ぼく、ケーキ だいすき」

※ この部分はほぼ同じであるが、「不行」の意味は確かに「ダメ」という意味もあるが、
ここではヤンヤンの疑問に対して「違うよ」と答えるべきである。

P 28 ~ 29

“大伯、给我称十斤水面。”“谁过生日啊？”“我们家老太太！”

“哦、老人家高寿？”“七十啦！”“大寿啊、恭喜！恭喜！”

“姑姑、鸡跳出来啦！”

「おじさん、おそばを5キください」

「だれのたんじょうびなんだい？」

「おばあちゃんのおたんじょうびなの」

「おいくつですか、おばあちゃんは？」

「70 さい！」

「ながいきだねえー そりゃおめでとう」

「おばちゃん、にわとりがとびだしたよ」

「そうそう、おそばも かわなくちゃ。

おたんじょうびには、ながいきしますように、
って おそばをたべるのよ」

「わっ、おばちゃん、にわとりが
とびだしちゃったよ！」

※ 私は、「十斤水面」が何を意味するのか分からなかった。前頁にケーキの話があったのでケーキに関する事かと思ったが「蕎麦」のことであった。中国にも日本同様、蕎麦を食べて長寿を祝う習慣がある様である。＜長寿麵＞しかしメイおばちゃんと麵屋の主人との会話は省略されている。買い手と売り手のやり取りこそ“荷花町”の人情ある雰囲気をもととさせるものであるし、幼児も楽しめると思えるのに省略されていることは残念である。

P 30 ~ 31

“嗯、都买好了。阳阳、我们回家吧。”“这么快就回家啊？我还没玩够呢！”

“阳阳乖、奶奶还在家里等着我们呢。”“那……就走吧。”

「ほんとだ、さあ、かいものはもうおわり。
ヤンヤンかえりましょう」
「もうかえるの？まだあそびたい」
「ヤンヤン、おりにこうでしょ？
おばあちゃんがうちでまってるのよ」
「ん…わかった。かえろう」

「やれやれ、いるものは ぜんぶ かったね。
ヤンヤン、そろそろ かえろうか」
「もう かえるの？」
「もっと あそんでいたいな・・・」
「ヤンヤン いいこだから、ね。
おばあちゃんがまってるよ」

※ 「やれやれ、いるものは ぜんぶ かったね。」はこのニュアンスだと朝市での楽しい買い物というこの話のテーマがいかに責務のように受け取られ、ワクワクする楽しさは薄れてしまう。ヤンヤンとメイおばあちゃんの“あれを買って、これを買って”という祖母の誕生日を祝うための買い物の心の躍動感を伝えるべきである。

P 32 ～

“ 今天、家里也一定会很热闹………… ”

「きょうはきっと、おうちにはぎやかだよ」

「きょうは にぎやかに なるよ…………」

5 おわりに…………日本語訳を試みて

一字一字の意味を確かめながら読み進めるうちに、それぞれの文字が生活に密着していることに驚いた。それは自分自身にとって、中国語は外国語であることを痛感させるものでもある。

日本語なら漢字やひらがな、カタカナでの表現方法がある。それに対し中国語は漢字のみの表現である。従って一字一字に深い意味がある。興味深い言語である。

また、この作品がストーリーの展開により愉快地にテンポよく話を進めるものではなく、江南地方の雰囲気や朝市を背景とする古き良き中国の伝統や近代化の様変わりしつつある人々の暮らしを描く絵本であるからだろう。

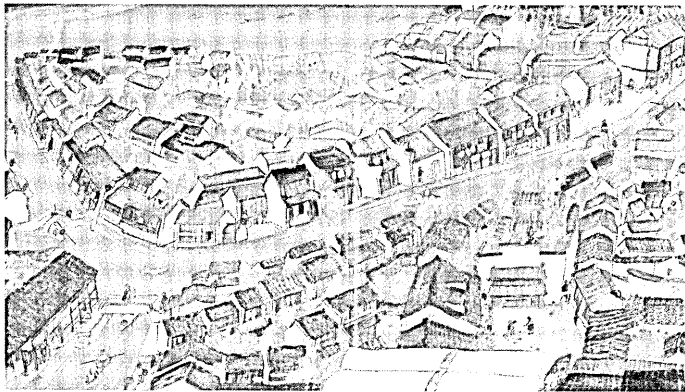
生活感あふれる挿絵は子ども達の興味を引くだろうし、ヤンヤンと一体化してあたかも荷花町に存在するような気持ちになることだろう。しかもソフトではのぼのとした色彩の挿絵が想像を助けてくれる。このことだけでも「日中同時刊行」された意義は大である。

しかし、本作品の日本語訳は中国人である訳者の独りよがりな文章が多い。その原因の一つには日本語を直訳しすぎている、という点にある。二つには幼児を捉える目のことである。子どもだから、より砕けて、より簡単に、より分かりやすくと考えすることは、見当違いである。幼児は鋭い感性で物事を見ている。真っ白い心で人の気持ちを感じ取る。あくまで原作者の意図を汲み取りながら、作品のもつ雰囲気を伝えるべきである。

以上のようなことから、1冊の絵本をとおし一字一字にこだわりながら読むことで両国の習慣や文化、伝統の違いに気付くことが出来た。

今や世界中が共存共栄する時代であるだろう。未来を担っていく子ども達にはこれからもどんどん視野を拡げて日本のよさ、外国のよさに気付いてほしいと願う。

従来の絵本の概念は、グリムやアンデルセンを中心とする西洋の話が中心であったが日本は勿論、中国にもやはり独自の昔話や新しい作品が次々に出版されている。今後も動向を掴みながら研究していきたい。



<参考文献>

- | | | | |
|-------|----------|------|----------------|
| 松居 直 | 絵本とは何か | 1973 | 日本エディタースクール出版部 |
| 渡辺 茂男 | 心に緑の種をまく | 2007 | 新潮社 |
| | 新華字典 | | 北京；商務印書館 |